Vol. 108, No.9　November, 2011　　題字　故 一萬田 尚登氏

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会（日印間の政治･経済･文化交流に貢献して 108 年）

<↑ニューデリー市内の
ディワリの飾りつけをした住宅

タージ･マハルへの持ち込み禁止の案内→>

目次

1. FORMULA1 GRAND PRIX OF INDIA 観戦記 ･･････ P. 3
2. インドニュース(2011 年 10 月)･･････ P. 7
3. イベント紹介 ･･････ P. 11
4. 新刊書紹介 ･･････ P. 14
5. 掲示板 ･･････ P. 15

1. FORMULA1 GRAND PRIX OF INDIA 観戦記
My First Visit to INDIA

日印協会事務局 渡邊恭子

初めてインドに行こうと思ってから30年以上経ち、私にはインドに行けないカルマがあるに違いないと思っていたが、10月26日から11月2日まで、とうとうインドへ行くことが出来た。記憶が薄れないうちにと書き綴った旅行記だが、皆様にご笑覧頂ければ有り難い。

--＊--◇--＊--◇--＊--＊--◇--＊◇--＊--◇--＊--＊--◇--＊◇--＊--◇--＊--＊--◇--＊--

それはナマステ･インディアでの｢チケット1～2枚なら取れますよ｣の一言から始まった。

インドに行きたい私と車好きの夫の利害が見事に一致するイベント､FORMULA1 GRAND PRIX OF INDIA (F1GP)の観戦を目論んでいた私達は、ツアーの募集が始まるのを待っていたが、ツアーどころか、入ってくる情報は初のインドF1GPの開催を危ぶむニュースばかりである。これはもう無理かもしれないと思っていた矢先の、先の一言。やはりどこかの旅行会社でツアーが催行されるかもしれないと期待していたが､10月に入ってからは､もう自力で行くしか無いと判断し､個人旅行を決意した。有給も取れた。そこで､｢チケット取れますよ｣と断言した旅行代理店C社にF1チケットと往復航空券の手配を依頼したのだった。F1開催が3週間後に迫っていた。

ビザの申請、航空券の手配、F1チケットの手配、ホテルの予約、それぞれの支払いと、息つく暇も無い有様だ。折角行くのだからタージ･マハルには絶対行きたいと夫が言い出し、自分達で手配している余裕が無くなり、ニューデリー観光と一緒に現地ツアーを申し込む。ツアーばかりではインド旅行の醍醐味が無くなってくるが、若くないので無理は止めようと、互いに納得する。ビザは18日に取れた。サーキットも出来上がり、関係者は10日も前に出来た、と自信満々だ。F1チケットは、20日にはC社のニューデリー事務所に届いていた。この時点で、F1の主催者である国際自動車連盟(FIA)による､ブッダ･インターナショナル･サーキット(BIC)のコース承認はまだ下りていない。税金や関係者の査証の問題も起きていた。

何とか準備は整ってきたが、最大の問題は、デリー東郊のグレーター･ノイダにあるF1会場BICまでの交通手段だ。シャトルバスチケットを購入したかったが、結局出発前には入手できず、バスチケットの販売店を教えてもらい、現地で直接購入することにした。もし入手できなくても、タクシーでの送迎を頼めば何とかなるだろう、とここまで準備して、時間切れである。10月26日、ディワリの日にインドへ出発した。

9時間余りのフライトで、インディラ･ガンディー空港に着いた。上空からの第一印象は、｢首都なのに緑が多い｣だ。着陸後の空港の景色は成田と変わらないが、飛行機が全部エアインディアだったので、インドを実感。Terminal3(T3)の様子は『月刊インド』で見た通り、とてもきれいだった。以前の空港では、インドならではの独特の香りがあったと言うが、T3では感じられない。ちょっと残念、どんな香りだったのだろうか。

入国審査を終え、荷物もピックアップし、建物の外に出た途端、さぁ来るぞ、雲霞の如くあんな者やこんな者達が…と思っていたら、全く来ない。昨年のコモンウェルスゲームズ以来、かなり事情が変わったらしい。実にスムーズに迎えの車に乗り込み、ディワリで休日だったため、デリー名物の渋滞も無くホテルに着いた。ディワリらしい蝋燭やランプの灯りは表から見えるような所には無く、電飾の

〈ニューデリー市内の幹線道路〉

〈ディワリの電飾〉

ド派手な住宅や店舗ばかりで、爆竹や花火の音が賑やかになってくる。実は、とっても幻想的な風景を想像していたのだが、初インドの夜は爆竹の大音響と共に更けていった。

翌27日は日帰りアグラ観光、28日はF1の練習走行日であったがデリー市内観光で過ごす。早朝のニューデリーでは歩道で布一枚にくるまって寝ている人達を、車窓からは草叢で用を足す人達を、観光地ではどんなに無視してもしぶとく纏わりついて来る土産物売り達を、これかぁ〜、と思いながら見ていた。

トイレに行けば、チップが必要な所とそうでない所があり、トイレおばさんがどっしりと座り込んでいたりもする。10ルピー札は必需品だ。ちなみにトイレの使用方法は、YouTubeで見つけて学習した。

犬も牛も、人間が適度な距離を保っている限り、安全を保障してくれる。

タージ・マハルでは世界遺産を守るためでもあろうが、持ち込み禁止の項目の多さには驚いた。

大統領官邸前からまっすぐ伸びる(共和国記念日にパレードを行なう)道路両脇には、インド国旗と国王と王妃が訪印中のブータン国旗が飾られている。

一方でどのような観光地に行っても、必ず金属探知機・手荷物検査・ボディチェックがあり、自動小銃を携えた警備の人達(軍隊か警察なのかはわからなかったが)が大勢いて、インドの抱える問題やテロの不安が頭をよぎる。ニューデリー駅に入る時は金属探知機、地下鉄(イエロー・ライン)に乗る時にも、金属探知機・手荷物検査・ボディチェックがあった。

2日間で名所観光をし、28日の夜はインドに駐在されているTご夫妻が食事に誘って下さったので、有り難くご馳走になった。いろいろお話をするうちに、奥様が28日のF1の練習走行を見に行かれたというので、会場の様子をお伺いし、シャトルバスの事をお尋ねした。すると、シャトルバスでないと会場には近づけない、タクシーでも無理ではないか、と言われる。心配したTご夫妻が代理店C社のニューデリー事務所やヘルプデスクに電話をして下った。無論解決しようはずもない。ここに至って、ようやく自分達の考えがインドのお菓子よりも甘い事に気が付いた。

食事を終えホテルに戻ってから、夫が代理店に電話をかけまくる。現地ヘルプデスク日本語対応のS氏とでは埒が明かないので、今度は出発前まで対応して下さっていた日本の担当者I氏に国際電話をして交渉する。すると、話はすぐまとまる。しかし、S氏に確認すると話は微妙にずれている。車を手配すると言うが、よくよく聞けばC社の手配するタクシーだと言うので、タクシーではなくてC社の車を手配してと念を押す。すると車の手配が出来ないかもと言ったりする。そこを何とかして！と押す。こんなことを繰り返しながら、夜の睡眠を挟んで29日の朝迄交渉を続けた。

〈Knowledge Parkで
シャトルバスに乗り換える人達〉

やっとまとまった話はこうだ。シャトルバス・チケットは完売で入手不可なので、C社の車を手配してもらい、会場近くのPARK & RIDE用の駐車場(Knowledge Park無料)に行き、そこから私達は、シャトルバスに乗って会場に向かう。このシャトルバスは、F1チケットを持っている人が無料で乗ることが出来、帰りも同じようにシャトルバスを使って駐車場に戻り、待機しているC社の車でホテルまで帰ってくる。

さぁこれでF1に行ける♪、早速今日(29日)の予選を

見に行こうと、迎えに来た車に乗り込んだ。実際の道程は 29 日と 30 日とでは異なったが、30 日も約束通り C 社の車が迎えに来て、決勝戦を楽しむことが出来た。両日共に、帰りは待っていたドライバーとすぐに会えた。

行く時は、デリー州からウッタルプラデシュ(UP)州へ入るのに税金が必要との事で、街中の渋滞にはまり時間がかかり、帰りは PARK & RIDE 用の Knowledge Park 行きのシャトルバスの乗り場が分らなかったり、とそれなりに苦労した。BIC への道は、延々と続く土漠(砂漠ではない)の中にあり、ところどころでテント村や牛の群れを見る事が出来る。BIC に着いてからも、自分達の座席のあるエリアまでは BIC 内を走るバス(無料)に乗り換えて行く。

車で会場に乗り入れようとしても、フロントガラスにパーキング・チケットを貼っていないと入れて貰えない。警備の人(銃も所持している)が竹棒で容赦無くフロントガラスを叩いていた。叩かれている人は文句も言わず、指示に従う。座席のあるエリアに入る時には、金属探知機・手荷物検査・ボディチェックが行われる。バッグに入れていたマーブルチョコが検査に引っ掛ったが、返して貰えた。

出来立てのサーキットはとても美しく、座席(写真上)はインド国旗のカラーに彩られていた。指定席なので、途中で席を立っても安心だ。トイレ(写真上から 2 番目)は洋式でトイレットペーパー完備、きれいだった。名物の座り込みトイレおばさんはいなかった。さりながら、出来たばかりの会場の階段の踏面が既にガタガタだったり、座席スタンド下の鉄骨がネジ留めされていなかったり、その鉄骨を支える土台は四角い板が重なっているだけ(写真上から 3 番目)だったり、インドらしさも散見された。

驚いたのは、地元採用のキャンギャル達の存在だ。インドでは有りえないミニスカートをはいて、美脚を顕わにしている。

飲食物の持ち込みは一切禁止、エリア毎にフードコートがあり、水 1ℓが 15 ルピー(通常価格)、サモサは 2 個 100 ルピー(イベント価格)でレンジで温めて出してくれるのが嬉しい。ビリヤニやサンドイッチもあり概ねイベント価格だった。買う時は、最初に金券を買わなければならない。当日限りの金券だが、使い切れなくても換金してくれない。最終日に、金券を使い切ろうと 15 ルピーと 20 ルピーの少額金券を数枚づつ握り締め、夫と真剣に計算している様が余程哀れに見えたのか、通りすがりのインド美女が、「良かったら使って」と、15 ルピーの金券をくれた。インドで施しを受ける日本人は稀だろう。一気にテンションが下がった。

さて、肝心の F1 だが、サーキットを犬が駆け抜けるアクシデントは、初日だけで済んだ。私達は長い直線コースが終る辺りの EAST ZONE STAR STAND 1 で観戦した。間近で見る迫力は素晴らしく、回転数の高い特有のエンジン音がたまらない。耳栓をしていても響いてくる。私達は小林可夢偉に声援を送っていた。

〈シューマッハを応援するインド人〉

観客の 99%を占めていると思われるインド人は、明らかに富裕層であり、ステータスとして F1 観戦しているのかと思っていたが、皆かなりの F1 好きであった。特にミハエル・シューマッハ

が一番人気だった。設置された大型スクリーンの映像や、リタイアしたフェリペ･マッサがバイクで目の前を通り過ぎていく様子に大歓声を上げ、心から楽しんで観戦していた。

大分経ってから、肝心の可夢偉がスタート後１周も走らないうちに複数の車の接触に巻き込まれてリタイア、応援していたのはチームメイトだったとわかり、がっくり来た。

そう、F1 を生で見る迫力は何物にも変え難いが、解説が無いので見落とすのである。何周も走っているのを見ていると、どれが１位だか分からなくなっていた。

優勝したセバスチャン･ベッテルに UP 州のマヤワティ州首相(UP 州では彼女のポスターが林立している)が賞杯を授与する時には歓声が上がった。9 位にエイドリアン･スーティルが入賞してサハラ･フォース･インディアが 2 ポイント獲得した事にも皆が歓声を上げていた。

<BIC の East Zone Gate 内の風景
靄の向こうにはサーキットが…>

初のインド F1GP は、大成功と言っても良いだろう。来年も、インドは F1 サーカスに組み込まれている。それまでに BIC のサーキット周辺の工事が順調に進み、F1 以外のモータースポーツが行われ、サーキットの保全･管理が上手く行くことを願っている。ナレイン･カーティケヤンやカーン･チャンドックかあるいは新たなインド人F1ドライバーがBICでポールポジションを獲得し、チェッカーフラグを受ける日も夢ではないだろう。

BIC からの帰路は高速もデリー市内も渋滞して時間がかかったが、C 車のドライバーのテクニックは秀逸だった。的確な車両感覚で隙間は許さず、きれいで高そうなベンツ相手に機関銃の様なパッシングを浴びせ、惜しみなくクラクションを鳴らす。道を尋ねた時には、警官の指示に従って迷わず高速を逆走する。インドには F1 ドライバーを輩出する素地があると確信した。そういえば、インドの高速は車専用道路では無いらしい。ラクダも象も牛も通行している。市場も開いている。懐が深い国だ。

翌日の 31 日は、お土産を購入し、ホテルの近所のマーケットでウィンドショッピングを楽しみ、11 月１日にインドを離れた。

約１週間の短いインド旅行であったが、思いのほかきれいなインドに安心し、ヒンディー語が役に立ったことを喜び、楽しい旅行だった。ガイドブックには騙された話も多かったが、サイクルリキシャやオートリキシャに乗る時に、最初に値段の交渉をすれば(現地の人よりは高額であったにしても)、それ以上を要求される事はなかった。きちんとお釣もくれる。ヒンディー語の D 教授が、「バ

クシーシと言われた時に小銭が無くても、○ルピー渡して△ルピーお釣を寄越せと言えば、ちゃんとくれるよ」とおっしゃっていたのを思い出した。結構義理堅いのだろうか。

ヒンディー語は、長母音でも短母音の様に発音することが多いようで、例えば「ダンニャワード(ありがとう)」ではなく「ダンニャワド」と言っていた。日本語表記する時の苦労がこれかと納得した。聞こえた通りがスペル通りとは限らない。本文も、現地の発音ではなく、日本で一般的に言われている表記とした。

次にインドに行くときには、もう少しディープなインドに触れてみようと思っている。

現地でお世話になったTご夫妻、ホテルのオーナーのWさん、同宿の駐在員の皆さん、旅行代理店C社の皆さん、ありがとうございました。旅行者にはわからない生活者視線の、貴重なインドでのお話を伺うことができ、とても勉強になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

2. インドニュース(2011年10月)
News from India

Ⅰ. 内政

10月13日

- デリー警察は、ハリヤナ州アンバラにおいて、デリーにむけて運搬途中の大量の爆発物、起爆装置やタイマーをタタ・インディカ(インド製の小型乗用車)から押収した旨発表。

10月22日

- 英字各紙は、10月17日及び19日にタミル・ナードゥ州で地方選挙が実施され、同州主要10都市で全インド・アンナ・ドラビダ進歩同盟(AIADMK)候補が圧勝し市長に選出された旨報道。
- 西ベンガル州ダージリン近郊のビジョンバリ地区で、河川にかけられていた木製の橋が崩落し38人が死亡、約100名が負傷した。

> **メモ:**
> **報道によれば、事故当時ゴルカ人民解放戦線の主催する行事に参加するため一度に大勢の人が橋上を通過しており、9月のシッキム州での地震の影響で橋が弱くなっていた上に、15～20人程度の橋の耐久重量に少なくとも150人程度が橋を通過していたことが原因とみられる由。**

10月29日

- 英字各紙は、タミル・ナードゥ州マドゥライ近郊の町アランパティにおいて、橋梁に仕掛けられていた爆発物が発見・押収された旨報道。

> **メモ:**
> **報道によれば、この橋梁は、現在インド各地において遊説活動中で、27日よりマドゥライを訪れていたインド人民党(BJP)の指導者アドバニ氏が隣接するケララ州へ向けての通過ルートであり、同人の通過数時間前に爆発物が発見・撤去された結果、アドバニ氏は難を逃れることができた由。**

Ⅱ. 経済

10月2日

- ビジネス・スタンダード紙は、チャヴァン・マハラシュトラ州首相率いる代表団がシン首相と会談し、ムンバイ都市圏における公共交通、住宅、水の供給に特に配慮し、インフラ整備を「国家プロジェクト」として承認し、中央政府が費用を負担するよう要請した旨報道。

10月3日

- インド情報通信IT省は、「情報通信技術及びエレクトロニクス(ICTE)の国家的議題を推進するための三つ組政策案」及び「エレクトロニクス政策2011案」を公表し、11月までパブリック・コメントを募集。

メモ:
上記「三つ組政策案」は、インドにおけるIT及びテレコムの成功、エレクトロニクス分野の弱みを分析した上で、現存する障害の克服や今後の更なる成長のためには、IT、テレコム、エレクトロニクスの三分野にまたがる総体的な政策が必要であるとの観点から連携政策として策定されたもの。

10 月 4 日

- ビジネス・スタンダード紙は、グジャラート州に投資誘致における優位を奪われているとして批判されているマハラシュトラ州が、今年 4 月から 9 月までの間に、1 年度内における 1 つの州への投資としてはこれまでのところ過去最高となる約 1.1 兆ルピーの投資計画を承認した旨報道。

メモ:
これらの投資計画の中には、HPCLの石油精製工場、GMの研究開発センター、LGのプネ工場、中国自動車大手のベイキ・フォトン社の工場建設などが含まれ、マハラシュトラ州はグジャラート州と異なり、投資主体とMOUを結ぶ前に投資計画に許可を与え、その後は必要なクリアランスを与える方法をとっている由。

10 月 7 日

- インド通信 IT 省は、「IT 政策 2011 案」を公表し、同案について 11 月までのコメントを募集。

メモ:
IT政策 2011 案では、IT関連産業からの収入を、現在の 880 億ドルから 2020 年までに 3,000 億ドルに増加させること、ICT分野で 1,000 万人の技能を持つ人々の人材プール、各家庭で少なくとも 1 名は電子的素養のある人であることの保証、等が謳われている。

- ビジネス・スタンダード紙は、現在 6 路線あるインドの高速鉄道計画のうち、プネ～ムンバイ～アーメダバード間が最初の高速鉄道として 2014 年に建設が始まる見込みである旨報道。

メモ:
報道によれば、同路線のプレF/Sはフランスのシストラ社が実施し、インフラ建設のための入札が 2014 年に開始されることが見込まれる由。また、同高速鉄道は高架式で全線フェンスで覆われ、踏切はない構造で時速 300km超での運行が計画されている。

10 月 10 日

- シン首相が議長を務める閣僚級会議にて、インド製薬業への海外直接投資について、新規事業への投資についてはこれまでどおり外資 100%まで自動認可事項とするが、既存事業への投資については、最大 6 ヶ月間は許認可事項とし、その 6 ヶ月中にインド競争委員会が必要な措置を設けるとの決定が行われる。

10 月 19 日

- NTT ドコモが 26%出資しているタタ・テレサービシズは、今後、同社が提供する電気通信サービスをすべて「タタ・ドコモ」ブランドに統合することを発表。

メモ:
タタ社はCDMA携帯電話の「タタ・インディコム」、固定電話の「タタ・ウォーキー」、インターネット・データカードの「タタ・フォトン」をこれまでGSM携帯電話で使用してきた「タタ・ドコモ」ブランドに統合。各サービスの相乗効果と効率性の向上及びコストダウンを図ったもの。

10 月 20 日

- インド商工省は、10 月 9 日に終了する週の卸売物価指数を発表。食料インフレ率は前週の 9.3%から大幅に上昇し、1 ヶ月半ぶりに再び 2 桁台の 10.6%となった。

メモ:
食料インフレ率急上昇の原因となったのは、野菜、果物、牛乳、卵・肉等。ランガラジャン首相経済顧問会議議長は、食料価格の上昇に懸念を示しつつも、カリフ作の農作物の到来によって穀物供給が増加し、11 月にはインフレ率が和らぐとの見解を示している。

10 月 21 日

- ヒンドゥー紙は、インド連邦政府は国家高速道路局(NHA)に対し、バンガロール・チェンナイ間の高速道路建設計画を原則的に承認しており、現在 NHA は連邦環境省との間で同省所管の保護森林地域の土地収

用に関する調整をおこなっており、タミル・ナードゥ州、アーンドラ・プラデーシュ州、カルナータカ州政府からは既に反対しない旨のレター(No objection letter)を取り付けている旨報道。

> メモ:
> 本計画は、チェンナイ・バンガロール国道(NH4)沿いのタミル・ナードゥ州内 260kmを片側 3 車線の道路で結ぶ計画で、総工費は 600 億ルピー、BOT方式で行われる。本件詳細に関する計画書は 2012 年 3 月までには発出予定。

10 月 25 日

- インド政府は国家製造業政策を策定し公表した。メディアは、「長く待たれていた国会製造業政策を政府は 25 日に承認した」と報じ、また、本政策は当初 9 月 15 日の閣議に諮られたが、労働問題と環境問題に関し閣僚間の意見が一致せず、パワル農業大臣を長とする閣僚グループに委ねられたことを紹介している。

> メモ:
> 国家製造業政策では、インドの製造業を深化し経済改革を再精緻化するための 6 つの目標を策定。
> ① 製造業の中期の成長率を 12～14%とし、2022 年までに製造業の対GDP比を少なくとも 25%とする。
> ② 2022 年までに製造業で 1 億人以上の雇用を創出する。
> ③ 地方移民と都市貧困層の包摂的成長のため適切な技能群を創出する。
> ④ 製造業の国内での付加価値を増大し技術を「深化」。
> ⑤ 適切な政策によりインド製造業の世界競争力を強化。
> ⑥ エネルギー効率、資源の最適利用、破壊された環境体系の回復を含め特に環境に関する持続的成長を確保。

- インド通信 IT 省は、村落へのブロードバンド接続のための全国光ファイバー・ネットワークの構築スキームを内閣決定した旨発表。

> メモ:
> 全国光ファイバー・ネットワーク構築スキームは、現在行政区やブロックの本部まで利用可能になっている光ファイバー・ネットワークを村落自治組織(グラム・パンチャヤート)レベルにまで拡大することにあり、これにより、雇用の創出、電子教育、電子医療、電子農業や農村部住民の都市への移動の減少などの効果が期待されている。

10 月 26 日

- 英字各紙は、インド内閣経済委員会が 25 日に 2011-2012 年産のラビ作物(冬作物)の最低支持価格(市場価格が下回った場合でも政府が農家から買い付けを行う際の最低水準の価格)を発表した旨報道。

> メモ:
> 政府は、油糧種子作物の最低支持価格を前年比で 35%引き上げ、ヒヨコ豆、レンズ豆についても各 33%、24%引き上げた一方で、小麦の最低支持価格の引き上げ率は約 10%となった。これはインドは食用油及び豆類を大量に輸入する一方で、穀物の備蓄は飽和しており、政府は農家に対し、穀物から油糧作物への転換を促しているもの。

10 月 31 日

- インド商工省は、10 月 1 日から施行された 2011 年度下半期海外直接投資(FDI)政策のうち、「無担保債券への転換等、いかなる種類であれ転換のオプションが内包されている株式への投資は FDI とみなさない」旨の 3.3.2.1.項を削除する旨のプレスリリースを発出。

> メモ:
> 報道によれば、FDI政策の変更につき経済界(特に中小企業)からの反対意見にあい、インド商工省は、海外投資家の撤退を困難にする措置を取り下げ、本年 10 月 1 日以前の状態に戻したもので、インド商工省が財務省を通じてインド準備銀行に働きかけた結果実現した修正の由。

Ⅲ. 外交

10 月 10 日

- インド外務省は、テイン・セイン・ミャンマー大統領が 10 月 12 日～15 日にかけてインドを訪問する旨発表。

10 月 12 日

- シン首相は、10 月 11 日～13 日の日程でインドを訪問しているベトナムのチュオン・タン・サン国家主席と会談し、インドとベトナムは海を介した隣国であり、シーレーンの治安と安全を確保する重要性を確認し、これらの分野における対話の継続と強化に合意。

10 月 18 日

- 南アフリカのプレトリアで、IBSA 対話フォーラム第 5 回サミットが開催され、インド、ブラジル、南アフリカから各首脳が参加。サミット後にツワネ宣言が発出される。

> メモ:
> IBSA(イブサ)は、ユーラシア、アジア、アメリカの 3 大陸から新興国で、かつ、民主主義国であるI(インド)、B(ブラジル)、SA(南アフリカ)で構成される枠組。今回の第 5 回サミットでは、グローバル・ガバナンス改革から、気候変動、アラブ・イスラエル紛争、シリアに至まで幅広いテーマについて議論。来年(2013 年)はデリーで開催予定。

10 月 21 日

- インド外務省は、10 月 23 日～31 日にかけてブータン国王王妃両陛下がインドを国賓として訪問する旨発表。ジグミ・ケサル・ブータン国王のインド訪問は 2008 年の即位以降 4 度目、10 月 13 日のご成婚の儀以降では初めての外国訪問となる。
- 10 月 20 日～22 日にかけてインドを訪問中のフランスのジュペ外相が 21 日にデリーでクリシュナ外相と会談、共同声明が発出される。

> メモ:
> 共同声明における印仏民生用原子力に関する記述は以下のとおり。
> ・印仏は、原子力エネルギーの平和的利用開発における知的財産権に関する協定の早期発効で一致。
> ・両外相は、ジャイタプールにおける欧州加圧水型炉 2 基の建設契約とりまとめを目標とした仏アレバ社とインド原子力公社間の協議の進展を歓迎するとともに、その早期履行に向けた期待感を表明。
> ・両国は、インドの原子力責任法の施行を受け、両国間の協力を健全に発展させるための適切な枠組を確保するため、さらなる意見交換を行う用意がある。

Ⅳ. 日印関係

10 月 4 日

- 10 月 2 日～6 日にかけて、横路衆議院議長の招待でクマール下院議長が訪日。4 日にクマール下院議長が野田総理を表敬訪問。

10 月 5 日

- 来日中のクマール計画・科学技術・地球科学担当閣外大臣が玄葉外務大臣を表敬訪問。

10 月 6 日

- ビジネス･ライン紙は、日本電気(NEC)は、チェンナイの経済特区に 6 億 8 千万ルピーを投じて携帯基地局間をマイクロ波で結ぶ際に使用する無線通信装置「パソリンク」の製造工場を設立する旨報道。

メモ:
報道によれば、NECにとってインドでの初の工場設立となるもので 2012 年 3 月までに操業を開始する予定。年間生産量はNEC全体の 10%～20%に相当する 3 万台を見込んでおり、工場稼働後の初期段階では国内需要向けだが、順次アフリカ諸国等への輸出を展開していく予定の由。

10 月 26 日

- 英字各紙は、全インド医科大学と明治薬科大学が共同研究等に関する覚書を締結した旨報道。

10 月 29 日

- 10 月 28 日～30 日にかけてクリシュナ外相が訪日。29 日に玄葉外務大臣との間で第 5 回外相間戦略対話を行うとともに、同日野田総理大臣を表敬訪問。

今月の注目点： インド･ミャンマー関係

10 月 12 日にミャンマーのテイン･セイン大統領が、大統領就任後最初の外国訪問国としてインドを訪問した。インドにとりミャンマーは、国境を接する北東部の開発を進めるための経済パートナーとして、また、北東部の反政府勢力の避難場所となることを防ぐという治安対策の観点から重要であるとともに、インフラ整備等を通じてミャンマーへの関与を強める中国との関係においても重要な国である。今回のテイン･セイン大統領とシン首相との会談で、インドはミャンマーへの 5 億ドル借款の追加供与を決定した他、両首脳は石油･天然ガス分野における協力の拡大に合意するなど、インドはミャンマーとの更なる関係強化を目指ししている。

3. イベント紹介
Japan-India Events

◇ 最近のイベント ◇

◆第 27 回 様々なインド『インドの高度成長と格差拡大の背景』

今回は 10 月 21 日(金) 午後 6:00～7:30 で 30 人弱の方に参加戴きました。講師の森茂子さん(日印協会会員･元世界銀行上級経済専門家･アジア開発銀行インド駐在代表)より『インドの高度成長と格差拡大の背景』という演題でお話戴きました。

以下、講演抄録となります。

〈講演風景〉

森さんは 1969 年インド人とご結婚、世界銀行勤務時代は「経済と教育」が専門であり、多くの報告書を作成されました。1980 年代中頃、インドとの関係で苦労された事などを語って戴きました。

識字と基礎教育の普及が開発への重要な鍵であり、インドへの世銀支援対策案を準備しようとしたが、教育特に基礎教育は中央政府と自治体の責任であり、「インドの初等教育はインド人の手で行う。国外からの干渉は必要ない」と言われたそうです。自助独立で国家開発を進めようとしたネルー王朝下の対応に苦慮したとの事でした。

1990年代に入り自由化を目指す様になり民営化による競

争が増す中で、“Thank you for flying with us”との国内線機内放送を聞いた時、インド側の態度の変化を感じた事は記憶に残ると語っておられます。

1970 年代以降の経済･社会の変化と同時に貧困率の推移を数字で提示され、現在インドが直面する主な課題としては膨大な人口･インフラ(電力、交通、その他)の未開発、未整備･未だ残る自由化への改革(現在自由度は 124 番目)･ガバナンスの不足･格差(所得配分の不平等による所得格差がみられる)などがあり、不平等差は世界的にみて高い状況であると指摘しておられます。そして不平等拡大の背景には、農業・製造・サービスの順よりも逆方向の開発パターンによるものとの指摘がなされました。

教育レベルと所得格差の点では、高等教育において、都市と農村、非貧者と貧者では差が著しくあることを見ることが出来るとしています。成人の識字率は未だ初等教育の普及が最近のことなので、アフリカと同レベルで低く、初等教育を受ける生徒の学習力も非常に低いことが指摘されました。これらの教育･不平等対策の課題としては、学習力の向上･高等教育へのアクセスの拡大がインドの IT を中心としたサービス産業、基礎的な知識･技能を持つ労働者を必要とする製造業、更に農村地帯の貧困削減を目指し農業分散化を進めるのに必要であるとも述べられました。教育レベルによる所得格差は開発過程が進むにつれ縮小していくのが普通ですが、 インドには少数民族や低カーストのように社会から排除されているグループがいることにもふれられました。

民主主義のもとでは、社会の底辺にいる貧者や弱者の問題が政治的優先課題として取り上げられ解決されるにはメディアの役目が大きいが、輝かしい経済高度成長率に集中しがちであると結ばれました。

インドの経済発展は目を見張るものが有る中で、経済と教育のひずみ、教育格差、貧困と教育、など日頃ではあまり取り上げない、異なるテーマでご講演戴き大変に勉強になりました。森さんはアメリカ的な考えをベースに物静かで研究家ハダの中に芯の強い女性を感じました。昨年は、ご自身の経験を通して見つめて来られたインドについて、『アサー家と激動のインド近現代史』を彩流社より出版されました。ご関心の向きは、どうぞお読み下さい。

講演後の懇親会でも更に自由闊達な会話が出来たと思います。「インドを語る集い」として講演者の方と会員の皆様に共に懇談戴き、有意義な時間を過ごす事が出来たと思っております。

◆『ジョティルモイ･ライ展 』～幻想的コラージュの世界～

2007 年、在京インド大使館において、日印協会後援の故 Sita Ray さんの個展が開催されました。今回は、御夫君であります、Jyotirmoy Ray さん(日印協会個人会員 ちぎり絵で、素材は、チラシや、新聞を使う)の個展が、11 月 1 日から、11 月 6 日まで、神戸市で催されました。

Ray さんは、製鉄の技術者で、1982 年から 1989 年まで 7 年間、神戸製鋼のコンスルタント･エンジニアーとして、神戸に住まわれました。

私は、原常務理事や青山事務局長から、Ray さんの神戸での個展を知らされました。即、神戸に滞在中の Ray さんと連絡をとり、まず、10 月 12 日に Ray さんと会い、その後、Ray さんの旧友の溝上富雄大阪外国語大学名誉教授にもお知らせし、15 日に、一緒に会いました。Ray さんには、神戸製鋼関連のご友人も多いのですが、個展が更に盛況となるよう溝上先生、そして、元印度総領事秘書の南波女史の協力を得まして、知人たちに個展の宣伝を行いましたが、その必要もなっかた程に、盛況でした。

<↑ 左 Ray さんと右 理事長
↓ 中央 Ray さん、右 筆者>

31 日には、来阪した原常務理事が、帰京前の展示準備中の個展会場を訪問してくれました。また、11 月 10 日に平林理事長が大阪大学での講演にお見えになり、Ray さんは理事長とも大阪大学の講堂で再会を果たしました。

日印協会を通じた､Ray さんとの素晴らしい神戸での出会いでした。

日印協会個人会員　阪本倉造

◆『チャンドラカント･サラデシュムク博士を偲ぶ会』

世界的シタール奏者チャンドラカント･サラデシュムク博士のご逝去を悼み、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

去る８月１５日未明、世界的シタール奏者チャンドラカント･サラデシュムク博士が、インドのプネ市で交通事故のため、突然帰らぬ人となったことは、私たちの胸に深い悲しみと言葉では言い尽くせない無念さを刻みました。その傷は深く、永遠に私たちの心から消えることはないのではないでしょうか。

『サラデシュムク博士を偲ぶ会』が、去る 11 月 9 日(水)午後 6 時半からインド大使館講堂で開かれました。満席の会場を前に、壇上ではこれまで博士と特に親交の深かった方々が、それぞれの立場から博士とのかかわり、博士の人となり、思い出、博士の奏でるシタールの調べの神秘性などを、映像も取り入れながら粛々と披露されたのが印象的でした。参会者はあらためて、博士がシタール特有の調べを通じて、国籍、貧富、老若、男女、健常者か障害者かなどに拘わり無く、あまねく人々の心に安らぎを与え、さらには精神的、肉体的に癒しの力を与えてくださったことなどをひしひしと思い出しながら、博士の遺徳を偲んでいました。

博士は本年 11 月 20 日に満 57 歳の誕生日を迎えるはずでしたが、それを待たず帰らぬ人となってしまいました。1954 年、マハラシュトラ州プネ市に生れたシタール演奏家歴 50 年のサラデシュムク博士は、4 歳の時シタールを習い始め、8 歳で初演奏、以来西ドイツ、オーストラリア、日本、米国等で数々の演奏会を開催しています。1991 年からは拠点を日本において演奏活動を続ける一方、琴や三味線、和太鼓とのコラボレーションにも積極的に取組んでいらっしゃいました。

博士は演奏活動を通じて日印間の友好親善の発展と強化に貢献してくださいました。シタールによる音楽療法にも力を入れ、「音楽を聴くことは心を自由にして緊張を解き放つ」として、トラウマからの開放、深いリラクゼーションの体験、より健やかで幸せを感じることなどを指導されていました。

また、2008 年 11 月からは令夫人とともに会員として当協会を支えていただいたことに、心から感謝の意を表します。

═◇ 今後のイベント ◇═

◇日印協会主催 交流会 開催

先月号でもお知らせ致しましたが、交流会を開催致します。日印の友好親善に関心のある方ならどなたでも参加できます。まだ、若干の余裕がございますので、どうぞ事務局宛にお申込み下さい。

日　時: 2011 年 11 月 25 日(金)　18:00～20:00
会　場: インド料理レストラン　“マハラジャ　丸の内店”　明治生命安田ビル　地下 2F
東京メトロ千代田線「二重橋前」駅 3 番出口 1 分
参加費: 4,000 円 / インドの方 2,500 円 / 学生 2,000 円
下記のいずれかの口座に事前にお振込み下さい。

1. みずほ銀行	八重洲口支店	普通	1007495
2. 三菱東京 UFJ 銀行	八重洲通支店	普通	1120452
3. 三井住友銀行	東京中央支店	普通	7422337
4. ゆうちょ銀行	019 支店	当座	0166037

申込先: 公益財団法人日印協会　☎03-5640-7604 / E-mail partner@japan-india.com

◇バラタナティヤム忠臣蔵

日印国交樹立 60 周年記念プレイベントとして行う、「インド舞踊、語り、オペラ、ドラムセッションのコラボレーション創作舞踊劇」です。

日　　時: 2011 年 12 月 11 日(日)　　15:00 開演
会　　場: 神奈川芸術劇場 大スタジオ　神奈川県横浜市中区山下町 261　☎045-633-6500

チケット: 全席自由　一般前売 2,800 円 / 一般当日 3,000 円
学生前売 1,800 円 / 学生当日 2,000 円
主催・問合せ・チケット予約:
インド舞踊研究所ナーティヤ・マンジャリ・ジャパン NMJ　☎045-681-4517

日印協会会員には、当日券料金を前売券の金額に割引の特典があります。
『月刊インド』10 月号に同封の『バラタナティヤム忠臣蔵』のチラシ持参の方限定です。

◇ヒンドゥー美術展—彫像と細密画　現在開催中!

『月刊インド』8 月号で紹介した本展は、12 月 18 日が最終日です。同時展示で、『16・17 世紀ヨーロッパで製作の南アジア地図』も行っています。まだご覧になっていない方は、どうぞお運びください。

開催日時: 2011 年 9 月 3 日(土)～12 月 18 日(日)　10:00～17:00（入館は 16:30 まで）
毎週月曜日 休館
会　　場: 石洞美術館　東京都足立区千住橋戸町 23 番地　☎03-3888-7520
京成線千住大橋駅徒歩 3 分
入 場 料: 大人 500 円 / 学生 300 円
※小学生以下(要引率者)・65 歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方は無料。
※大人の方以外は受付にて証明書のご提示をお願いいたします。
詳細　URL http://sekido-museum.jp/

4. 新刊書紹介
Book Review

§『凡人の凡人によるグローバル戦略 インドと踊れ vol.1』

原作: 土屋昭義 / 漫画: JUNGLE
発行: 創碧社
定価: 1,500 円+税　　ISBN 978-4-903666-02-0 C2934

面白い! とにかく面白い! 読み始めたら最後、一気通貫、読み進んでしまう。
どこをどう見渡しても、希望を持てそうな材料はなかなか見当たらない昨今の“ニッポン”の状況を吹っ飛ばしてくれる痛快なマンガである。できの悪い息子が一念発起、インドに渡って一肌脱いで、苦労の果てに成功を収めるサクセス・ストーリー。
ご一読をお勧めします。

5. 掲示板
Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回は、12月16日(金)の発送を予定しております。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

〈お知らせ〉

当協会のホームページでは、会員･非会員を問わず皆様からの日印関係に関する提言を広く募集しております。

この度、「日印国交樹立60周年を考える」との投稿を頂き、早速掲載致しました。レスポンス投稿もできますので、インターネットをご覧になれる環境をお持ちの方には、ご高覧･ご高評賜りたく存じます。

また、新たな提言がございましたら、是非ご投稿下さい。随時受け付けております。“談論風発”を期待しております。

〈編集後記〉

先日テレビを見ておりましたら、あの俳優の松平健さんが、「マツケンサンバ」に続く大ヒットを目指して、両A面CD「マツケン･マハラジャ / マツケン･カレー」を11月2日にリリースするという事でした。マハラジャと言えばインド、カレーといえばインド。インドがあの将軍様をインスパイアする存在になったとは、驚きです。

これはもう松平健さんには交流会で踊って頂くしか…、という事はございませんが、交流会では皆様に喜んで頂ける景品も用意しております。学生会員の方も申し込んで下さり、事務局としても、嬉しい限りです。どうぞ、皆様お誘い合わせの上ご参加下さい。

日印親善のために会員の輪を広げましょう

法人会員･個人会員の入会をお待ちします

1903年、大隈重信、澁澤榮一らによって創設された日印協会は、これまで日印の相互理解と両国の親善増進のために、日々地道な努力を続けてまいりました。ここ数年来の日印の良好な関係がより一層深まるためにも、会員の獲得は重要な課題であると考えています。インドに興味のあるお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。

ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。

日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員･個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費：個人　6,000円/口
　　学生　3,000円/口
　　一般法人会員　100,000円/口
　　特別法人会員　150,000円/口

☆入会金：個人　2,000円
　　学生　1,000円
　　法人　5,000円
　　(一般法人、特別法人会員共に)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解･ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド Vol.108　No.9 (2011年11月18日発行)　　発行者 平林 博　　編集者 青山 鑛一
発行所　公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604　Fax: 03-5640-1576　E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: http://www.japan-india.com/